東京内湾における漁業の変化と村落社会の再編過程

岩渕　祐二

本研究は、東京内湾の一漁村における実証研究を通して主要漁業である海苔養殖業の盛衰、漁村内部での漁撈組織や村落間における勢力の変化などに対応して、村落社会の再編成の過程を明らかにすることを目的としている。

調査村落である高須部落を含む千葉県木更津市金田地区は、高度

経済成長期以降における内湾埋立の進行するなかで、地先海面を開発されることなく現在に至っている数少ない漁村の一つである。

この地区における海苔養殖の着業は、明治三一年にはじまるが、戦後におけるこの漁業の歴史を大別すると二つの時期にわけてみることができる。すなわち、海苔養殖漁家が増加し、新たな漁撈組織や漁場秩序の確立されてゆく時期と、養殖技術、とりわけ採取・調整加工の大型機械化、養殖漁家の合理化などに伴う、漁場秩序が再編されてゆく時期である。本報告では、特に後者の過程に重点を置いて取り上げる。

また、この地区では、しばしば海苔養殖の先進地にみる海苔株のような排他独占的な漁場利用は行われず、一定の条件さえ整えば海苔着業が可能であった。そのため、特に戦後となると海苔養殖漁家が増大し、漁場は飽和状態に達する。この海苔柵の過密化に加えて、臨海工業の進出による水質汚濁、養殖技術の大型機械化に伴う生産コストの増大、海苔価格の低迷や後継者の不在など海苔養殖をめぐる諸条件は次第に厳しくなった。

この事態打開のため、昭和五三年にはじまる構造改善事業の導入による漁業の合理化、具体的には海苔養殖の休業・転職の奨励による海苔養殖漁民の大幅削減計画の結果、漁村内部には、採貝や小型機船底曳網漁業などへ転じていく者と、他産業への就業者が増大する。それに伴い漁場利用のあり方も多様化し、漁場秩序が再編されることとなる。

高須部落は、木更津市合併前の金田村の中心的部落である中島の枝村として成立した村落である。明治二二年旧金田村成立時に区となり行政上は一応行政末端の一単位をなすことになったのであるが、漁場利用をはじめ自治的組織上では、近年にいたるまで依然として中島の傘下に位置していた。

しかし、中島さらには金田地区全体の漁業に対する依存が低下してゆくなかで、海岸部に位置する高須部落では漁業従事者が依然として多く、そのため、漁協における位置も相対的に上昇していくことになる。また、高須部落内での漁撈組織は、部落内の貝類仲買業者を中心とした新たなネットワークによる漁場秩序を形成し、海苔養殖業の最盛期に支配的であった漁業協同組合の漁場利用秩序を形骸化させ、新たな漁場ひいては村落秩序が再編されつつある。

さらに、目下建設中の東京湾横断道は、金田地区を千葉県側の上陸地点としていることから、今後は生活環境をはじめ漁場環境の激変が予想される。この様な状況下にあって、多様化した村落秩序が今後どのように再編されてゆくかが注目される。

（早稲田大学）